



金史良全集

河出書房新社

I

金史良全集 I

昭和48年2月28日 初版発行

¥ 1200

編 者 金史良全集編集委員会

発行者 中 島 隆 之

発行所 株式会社 河 出 書 房 新 社

東京都千代田区神田小川町3-6

電話 東京(292) 3711 (大代表)

振替口座 東 京 1 0 8 0 2

©1973

0397-414101-0961

印刷・晝印刷

製本・中西製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

目次

荷	5
光の中に	9
土城廊	37
天馬	67
蛇	105
コブタンネ	111
箕子林	119

草深し……………

147

無窮一家……………

171

落照……………

207

解題……………

375

安宇植訳

任展慧

金史良全集

I

凡 例

一 本巻の本文校訂は任展慧が担当した。

一 本巻に収録した作品中、原作者による改作等の異同がある場合は、いずれもその最終作品を収録した。

一 日本語による作品は原文のまま収録したが、校訂者が、若干の改訂を施した。また現在の読者のために、ルビと注を付した。

一 注は原注と思われるものは8ポ、校訂者による短い注は6ポの割注で、それぞれ（ ）内に入れ、長い注は本文中に（一）（二）の番号を付し、各作品末尾に出した。

荷

棒の兩端に吠^{かます}を吊して、ぶらんぶらん擔ぎ廻る例の「皆喰爺」が、寮の裏で見える度に、私は尹書房^{ウツシヨウ}を思ひ出すのだ。

尹さんは少しはましのチゲ（擔具）労働者である。然し土壇場にまで突き込まれて、喜劇ならぬかはつた意慾の生活を弄^弄する點では、全く同じいだらう。

早朝起き上ると、尹さんは先づ自分の版圖を檢分し出すのだ。崩れかかった彼の小屋が、しょんぼり立つ低濕地の一帯は、書房の心の中では、彼の所領と定められてゐる。地面に境界の線を引き廻つたりして、夢中になる。

終日街を出歩いて、三十錢も稼げぬことだらう。今日はどうでした？ と夕頃つい出會つて、問ひかけでもしたら、彼は直様癖^{ナツサマセキ}の手を頭にやつて、

「なあ學生さん」と嘯^{ヒキ}くのだ。「偉え不景氣でがしてのう」

彼は裸一貫である。何時かの述懐に依ると、二男一女が一時に熱病でやられてゐるが、信用はおけない。唯彼の女房が産褥で悶死したことは、どうにか事實だと云はれてゐる。今年の夏なども歸國すると、尹書房はどうして嗅ぎ付けた

ものか、最早その翌日には、庭先に件のおどした體を現はしたことがある。彼は喰つてかかる様に、突拍子に叫んだのだ。

「日本てとこさ、豊作ちうですな」それから、歴とした小作農でもある様に、ぶつくさ愚癡をこぼした。「チエーギ堪^堪らねえだ、粃一斤五錢でやがらあ」

又或日の如きは、高潮した興奮の中で、すつかりせき込むのだ。……羽二重^{ハニカサ}の見捨品を日本内地の工場から直接取り寄せて、大儲けをする者が居る。日本へ渡つたら、何とか取り計つて呉れぬか。佐賀の居所は何處だ。一筆走らして貰ひ度い、等と。然し次の瞬間、尹さんは先の仰山な用件はけろりと忘れたものか、

「學生さん」と急に話題を變へ、えへらえへらへうきんに笑ひ出すのである。それはべらぼうな吐言の豫告でもある。そして、彼はむきになつて、村長と駐在所長とどちらが位の高いものだらうかと頭をひねつた。私はつい苦笑すると、彼は益々顔面に深い皺^{しわ}を刻んで、それ見る至極難題で困つたらうとでも云ふみたい、胡麻鹽^{ゴマシホ}の蓬髮^{ほうはつ}をくさくさ掻き立てたのだ。

——秋の學期が始まり、佐賀に再び歸つてから間もないことである。郷里の母の手紙は、苛性曹達を嚥^のんだ彼の死を告

げてきた。あの莫大な夢想と陶醉と自尊心の荷が、たうとう始末に逐へなくなつたのかと、私は異様なショックに打たれたのだ。然し今日、寮裏でひよつこり例の「皆喰爺」を見つけると、この爺はあの偉大な口と胃腸の名譽にかけても、最早自殺等は出来まいと、不圖私は思つたことである。爺はその固く喰ひしばつた口の中で、どんな言葉を反芻してゐるのだらう、諸君も知つてゐるのだ。炊事場の掃溜場から、吠を吊した例の棒を肩に掛けて腰を上げると、靱、羽二重、村長を咥くかほりに、爺は斯う怒つた様に喚くのである。

「ちゆつ、おいが荷物はこぎやんとばかりしこ」

「佐賀高校文科乙類卒業記念誌」(一九三六年二月)に所収

光
の
中
に

私の語らうとする山田春雄は實に不思議な子供であつた。

彼は他の子供たちの仲間にはいらうとはしないで、いつもその傍を臆病さうにうろつき廻つてゐた。始終いちめられてゐるが、自分でも陰では女の子や小さな子供たちを邪魔してゐる。又誰かが轉んだりすれば待ち構へたやうにやんやと騒ぎ立てた。彼は愛しようとしなしいし又愛されることもなかつた。見るから薄髪の方で耳が大きく、目が心持ち白味がかつて少々氣味が悪い。そして彼はこの界限のどの子供よりも、身装みづけがよごれてゐて、もう秋も深いといふのにまだ灰色のぼろぼろになつた霜降りをつけてゐた。そのためかも知れないが、彼のまなざしは一層陰鬱で懷疑的に見える。だが妙なことに彼は自分の居所を決して教へようとはしなかつた。私は大學からS協會への歸りみちなど、押上驛の前で二三回彼に遇つたことがある。彼の歩いて來る方向からすれば、どうやら彼は驛裏の沼地あたりに住んでゐるやうだつた。それでいつか私はかう質ねたものである。

「驛の裏に住んでゐるの？」

すると慌てて頭かぶをふつた。

「違ふやい。僕の家は協會のすぐ傍だよ」

勿論途方もない嘘である。彼は學校からの歸りに、わざわざここへ遠廻りして遊びに來ると、夜の部がひけるまでは決して歸らうとはしなかつた。聞けば婆やの部屋で飯を貰つて食べたことも一度ならずあつたやうである。私ははじめそんなに彼に注意を向けてはゐなかつた。だが或る晩彼が薄暗い婆やの部屋で飯をかき込んでゐる様を見た時は、はつと驚いて立ち止つたのである。「へんだな」と私は自分に云つた。

だが私はどういふ意味でさう云つたのか、はつきりはしなかつた。そしてもう一度「へんだな」と呟いた。その恰好がどうも私には曰いくがありさうでなかなか思ひ出せなかつた。ちぢかんだ丸背にしろ、顔にしろ、口の恰好にしろ、箸の使ひわけまでも。しまひには私は息苦しくなつて黙つたまま彼の傍を離れて行つた。だがその後といふもの、私は彼のことをあまり氣にしなくなつた。その中に彼と私の間にはまことに奇妙な事件が一つ起つたのである。――

その頃私はこのS大學協會のレジデント（寄宿人）だつた。ただ私の仕事といへば、その市民教育部で夜の二時間程英語を教へてゐればよかつた。それでも場所が江東近くの工場街で、習ひに來る人々が勤勞者であるだけに、二時間の授業

といつても骨が折れた。晝間へとへとに仕事で疲れてゐる彼等であつてみれば、餘程こちらが緊張してかからない限り、みなはうつらうつらまどろんでしまふからである。

夜の部で元氣なのはやはり子供部である。私たちの教室のすぐ下がその教場になつてゐて、いつもわあつと彼等の騒ぎ立てる音が聞えて來た。私の生徒たちはその音に驚いて腰を掛けなはすといつた工合である。古いピアノがぎんぎん鳴り始めると、子供達は一齊に「われらはすこやかに、いざ育たう」といふ歌を、屋根でも飛んでしまひさうな元氣な勢で張上げた。

（もう時間だな）と思ふが早い、今度は豆でも挽き立てるやうな騒ぎが湧き上る。子供たちは階段をわれ先にと駆け上つて來るのだ。授業を終へて教室を出ようとした私は、すぐに子供たちにつかまつて、全で鳩飼ひぢいさんのやうになるのだった。甲は肩にのり、乙は腕にすがりつき、丙はしきりに私の前を小躍りしながらはね上る。幾人かは私の洋服や手を引張り、或は後から聲を立てて押しやつて私の部屋まで來る。そこで戸を開けようとする、もはや先からはいいつて待ち伏せてゐた子供たちが、一生懸命になつて開けさせまいとしてゐる。こちらでも子供たちが蟻のやうにたかつてしきりに開けようとする。かういふ時にきまつて山田春雄ははたか

ら邪魔をするのだつた。

「ほつときなよ。ほつときなよ。あーあーあー」

と叫びながら、私の鼻先の前で氣味よささうにへうきんな踊りをしてみせた。たうとうこちらが凱歌を上げてなだれ込んで行くと、室内では先から待ち構へてゐた六七人の少女がきやあきやあしながら悦び立てた。

「南先生ー 南先生ー」

「あたかも抱つこして」

「あたかも」

さう云へば私はこの協會の中では、いつの間にか南先生で通つてゐた。私の苗字は御存じのやうに南と讀むべきであるが、いろいろな理由で日本名風に呼ばれてゐた。私の同僚たちが先づさういふ風に私を呼んでくれた。私ははじめはそんな呼び方が非常に氣にかかつた。だが後から私はやはりかういふ無邪氣な子供たちと遊ぶためには、却つてその方がいいかも知れないと考へた。それ故に私は偽善をはる譯でもなく又卑屈である所以でもないと自分に何度も云ひ聞かせて來た。そして云ふまでもなくこの子供部の中に朝鮮の子供でもゐたならば、私は強ひてでも自分を南と呼ぶやうに主張したであらうと自ら辯明もしてゐた。それは朝鮮の子供にも又内地

（日本、以下同じ）の子供にも感情的に悪い影響を與へるに違ひないからだと。

ところが、或る晩のこと子供たちと騒いでゐる所へ、私の生徒の一人が眞着にひきつったやうな顔をしてはいつて來た。それは自動車の助手をしながら夜になると英語や數學を習ひに來る李といふ元氣な若者であつた。彼は戸を閉めると挑みかかるやうな調子で私の前に立ちかはだかつた。

「先生」それは朝鮮語だつた。

私ははつと思つた。子供たちもどういふ意味かは知らないが何か峻しい空氣にけおされて、彼と私の顔をかはるがはる見守つてゐた。

「さあ、又後で遊ぶんだ。これから先生は用事があるんだから」と私は落着きをつくるひながら口元に微笑みさへ浮べた。子供たちはすぐごと出て行つた。だが山田春雄のまなざしばかりは異様な光を點して、さぐるやうにじつと私を見つめてゐた。私は今だにその薄光りしてゐた目を忘れることは出來ない。彼は蟹のやうに横歩きで方々へぶち當りながらぬけ出るのだつた。

「まあお掛けなさい」私は二人きりになつた時靜かに朝鮮語で話しかけた。「ついお互ひ話し合ふやうな機會もありませんでしたね」

「さうです」李は立つたまま叫んだ。「私は實際あなたにどちらの言葉で話しかけていいか分りませんでした」彼の言葉の中には若者らしい憤りがのたうつてゐた。

「勿論私は朝鮮人です」といふ自分の答は心なしかいささかふるへを帶びてゐた。恐らく彼に對しては少くとも苗字のことが氣にかかつてゐたのであらう。或は平氣な氣持でゐられなかつたのも、その點自分の身の中に卑屈なものをつけてゐた證據に違ひなかつた。そこで私は寧ろ少しばかりうろたへながら、かう質ねてしまつた。「何かお氣にさはるやうなこともあつたでせうか」

「あります」彼は昂然と云つた。「どうして先生のやうな人でさへ苗字を隠さうとするのです」

私は咄嗟で言葉につまつた。

「まあ落着いて坐らうぢやありませんか」

「どうしてか、私はそれが訊きたいのです。私は先生の眼や顴骨や鼻立から、きつと朝鮮人であるのに違ひないと思ひました。だがあなたはそんな素振り一つしなかつたやうです。

私は自動車の助手をしてゐます。寧ろ私のやうな職場の人々に苗字のことでいろいろ氣拙いことが多い筈です。だが」彼は波打つ激情の餘り吃り出した。どうして彼はこんなにまで興奮してゐるのであらうか。「だが私はそんな必要を認めな

いのです。私はひがみたくもなければ、又卑屈な眞似もしたくないのです」

「全くです」私はかすかに呻くやうに云つた。「私も君の云ふことと同感です。だが私としては子供達と愉快にやつてゆきたかつただけのことです」廊下では相も變らず先の子供たちが騒ぎ合ひながら、時々戸を開けては涙たれ顔で覗いたり、目をつぶつて舌を出してみせたりした。「例へば私が朝鮮の人だとすれば、ああいふ子供たちの私に對する氣持の中には、愛情といふものの外に悪い意味での好奇心といつていいか、とにかく一種別なものが先に立つて來ると思ふのです。それは先生として先づ淋しいことです。いや寧ろ怖ろしいことに違ひない。だからと云つて私は自分が朝鮮人だといふことを隠さうとするのではない。ただ皆さんがさういふ風に私を呼んでくれた。又私もさうことさらに自分は朝鮮人だとしやべり廻る必要も認めなかつただけなんです。だが君にさういふ印象を少しでも與へたならば、私は何とも辯解のしようもないのです……」

と云つた時、戸を開けて覗き込んでゐた子供の中、突然大きな聲で喚いたものがある。

「そうれ、先生は朝鮮人だぞう！」

山田春雄だつた。瞬間廊下はしんととなつた。私も一寸ばか

り面喰はずにはゐられなかつた。そこで努めて氣を落着けるやうにしてかう云つた。

「いづれ又會つてゆつくり話しませう」

李はわなわな手をふるはせながら出て行つた。山田をはじめ二三の子供たちが逃げ出すやうだつた。私は呆然と立ち盡してゐた。一瞬間電光のやうに俺こそ偽善者ではないかといふ考へが閃いたのである。階下の方ではがんと鐘の音が聞えてゐた。子供たちは騒ぎたてながら雲のやうに下りて行く、その音が恰も遠い所からのやうに響いて來た。すると戸がそつと開いて忍び足でやつて來た山田が、背をちぢかめて隙間から部屋の中を覗き込むのだつた。それから、「やい朝鮮人！」と云つて舌をべろりと出して見せると、追はれるやうに再び逃げて行つた。

これ以來、益々山田春雄は意地悪くなつて私につきまとして來た。私が彼に一層の注意をむけるやうになつたのはそれ以後のことである。

成程さう考へてみれば、ずつと以前から彼は私を疑りの目で監視しながらつきまとしてゐたやうであつた。時々私が言葉尻などにひつかかつて舌が廻らないやうな場合にも、よくそれを眞似て殊更にわらひ立てたりするのは彼だつた。彼は最初から私を朝鮮出身だとにらんでゐたのに違ひない。であ